

身近なまちの風景物語(4)

撫でる像

はじめて降り立つ駅では、何が待ち構えているのだろうか、新たな出会いを期待する。

駅前広場に出ると、まず正面を見て何が目に入るか、次に左へ90度顔を曲げ、さらにゆっくりと右へ、しっかり180度、首をまわす。

どうもこれがクセになっているようだ。そのまちを思い出す時の“表紙”を目に焼き付ける習慣ができた。

かつて、どの駅前も同じ風景だと揶揄されることがあった。しかし、私は決してそうは思わない。十駅十色である。

駅前広場には、モニュメントが置かれることがよくある。著名な彫刻作家に依頼した平和や未来、家族、幸福をテーマとした銅像やオブジェだ。茨城県内の駅前にはその中でも裸婦の銅像が多い。

特に乗降客が多く、観光客も多い駅前では、そのまちのイメージを表すモチーフが選ばれることがある。

まちの出身者やゆかりのある人物の銅像はわかりやすい。水戸駅北口の水戸黄門、助さん、格さんの三人はその代表である。

一方、まちの伝統ある祭りや花火などをモチーフにしたり、特徴ある交通や産業遺産を設置するなど、そのまち「らしさ」を表現する工夫がみられる駅もある。

例えば、常陸大子駅前には蒸気機関車、日立駅前には発電用のタービン動翼が置かれている。駅に降り立

つたび、そのまちの歴史に刺激を受ける。

まちに住む人々、そしてそのまちを訪れる人々にとって、駅前の銅像やモニュメントは、まちのイメージを共有する媒体になる。

ただし、モチーフにする対象によっては、像にしにくいものもある。特に農産物や食材関係である。八街駅前(千葉県)の落花生や草加駅前(埼玉県)の煎餅^{せんべい}を題材にした像は、その苦労が偲ばれる。

その点で、水戸駅南口前に置かれた納豆像はシュールである。背丈以上もある大きなわら納豆。少し開いたわらの中からは、黄金の納豆が顔を出す。豆は一粒ずつしっかりと形作られている。

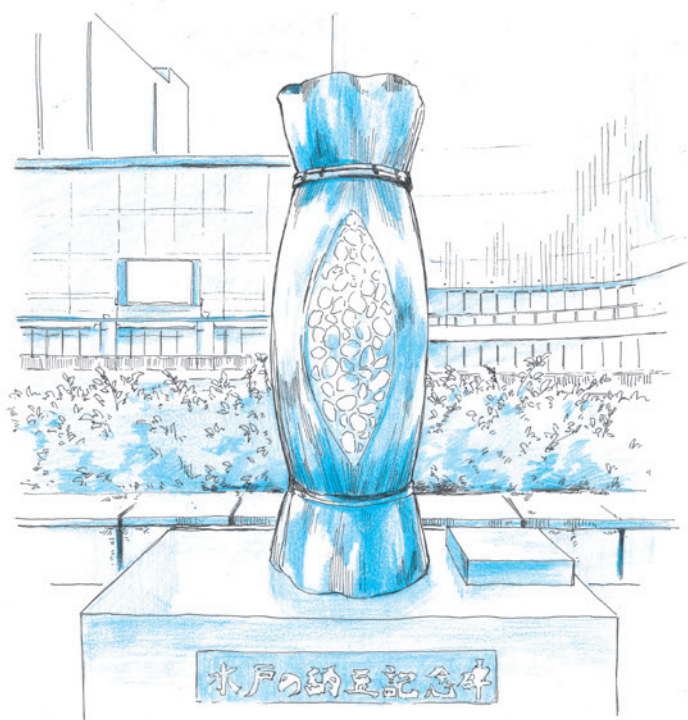
よく見ると、高さ1mほどの豆の部分は少しメッキが剥がれ、黒ずんでいるように見える。ちょうど手の高さである。

訪れる人が手で撫でるのであろう。手のひらで感触を楽しむ姿が浮かぶ、親しまれる像になった。久しぶりに味わう新鮮な出会いだった。

一方で思案する。もし、自分が納豆像の企画を依頼されたら、どうしただろう。素材、大きさ、デザイン、…。う～ん、悩む、難しい。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群3年）